

亀津浜踊り 保存会(徳之島町)

発表者: 新 田 武 男 氏

皆さん、きゅーがめーら。こんにちはということです。

私は鹿児島島の南南西468キロ、太平洋と東シナ海の接線上に浮かぶ長寿の島、子宝の島、闘牛の島、周囲84キロの徳之島から来ました。

今年は、奄美群島の日本復帰60周年の年でもあります。私は、亀津浜踊り 保存会会長の新田武男と申します。

徳之島は3つの町からなっており、人口は2万5,000人余りの島です。基幹作物のサトウキビを中心に畜産、園芸が盛んで、「春一番」というブランド名のバレイショ、その他、ショウガ、ニンジン、タンカン、マンゴーなどが栽培されている農業の島でもあります。亀津浜踊り 保存会は、男性16名、女性29名、合計45名の会員で構成されています。そのうち高齢者が32名です。



亀津浜踊りは、島では古い民俗芸能であります。記録などがなく、はっきりした発祥の年代は分かりませんが、島唄や島踊りの中では、最も古い芸能であることは多くの郷土史家が語っています。古くは、ニライカナイ(海の彼方に住む神様)を迎え入れる浜で踊る芸能でありました。踊りは男

と女の円陣による掛け合いで、最初はゆっくりと本歌を歌い、24番まである歌詞を奇数は男性が、偶数は女性が唄いながら踊り、徐々にテンポが速くなっていき、踊りができなくなった状態になったら終了する踊りです。この男女の掛け合いにも、豊作祈願の意が込められていると言われてしています。

戦前から戦後、昭和30年頃までは郷土行事のたびに夕方から踊り始め、夜の10時、11時頃まで踊るものでしたが、高度成長に伴い、若者の人口流出や踊り手、唄い手の高齢化などにより 伝統文化の継承者が激減し、一時は衰退し、危機的な状況になりました。浜踊りを残

したいということで、先輩達は昭和46年に亀津浜踊り 保存会を立ち上げ、歌詞の整理を行い、毎月15日を定例の稽古日に設け、再興に取り組んできたところです。浜踊りには15種目の唄と踊りがあったのですが、現在は7種目しか踊れないため、これをビデオに記録し保存することができました。



そのかいあって、昭和51年には徳之島町の無形文化財に指定を受けることができました。私も、亀津浜踊りに携わってから既に30年余りになります。浜踊りの指導者としてやっていくうちに、愛好者の皆さんもだんだん高齢になってきたことから、このままでは継承できなくなるのではという不安がありました。そして、平成

13年の自治公民館建設を機に再活動の機運が高まり、その後、平成18年10月に全国各地の出身者から篤志を募り、伝承活動の足跡となる石碑を建立しました。

これをきっかけに、次の世代に何とか伝承しようと40代、50代の若手世代に声かけをして、若手は毎月15日の練習日以外に、毎週水曜日に練習日を設け、浜踊りの唄と踊りの練習を2時間ほど、約2年間指導し、今日に至っております。今では若手世代の男女13名が浜踊りの練習に加わり、



毎月第1・第3水曜日、夜の8時から2時間、定例の練習日を設け、練習に取り組んでおります。

活動の成果としては、

- 1 毎年、地区の小・中学校の運動会では、郷土芸能伝承として踊りの指導で全児童生徒と教職員及び地域の人たちも交えて浜踊り



をしている。

- 2 小・中・高校生が参加することにより、地域における異年齢間交流、特に高齢者とのコミュニケーションが深まる。
- 3 高齢者予備軍との交流の場としても大切な機会である。
- 4 活動に転入者を勧誘、参加してもらうことにより、地域への協力と理解が深まり、相乗効果が生まれる。
- 5 自治会活動やボランティア活動の中心になっているのが、浜踊り 保存会のメンバーとなっている。

最後になりますが、このたびは表彰されましたことに感謝申し上げます。これからも私たち高齢者は指導者として、先人の残したかけがえのない文化遺産である亀津浜踊りを、末永く次世代へ継承していけるように後継者育成に励んでいきます。

ご清聴ありがとうございました。おぼーらだれん。